

生活科「ふれあい教室」における発達障害児の反応

三本隆行

【要約】

イヌとウサギを利用した小学校の生活科の授業「ふれあい教室」において、通常学級の児童とともに参加した特別支援学級の児童2名が、生命を実感させたり動物に関する正しい知識を学ばせようという実施者のねらいに対して、他の児童とは異なる反応を示した。

1 はじめに

飼育方法や動物との接触方法について獣医師が児童や教師を指導するため、生活科、理科および委員会活動にゲストティーチャーとして参加し、児童に動物に触れさせたり心音を直接聞かせることで、生命の実感や動物に関する正しい知識を持たせる授業支援活動（いわゆる「ふれあい教室」）が各地で実施されている。

今回、奈良県内の小学校2校で実施されたふれあい教室に参加した特別支援学級の児童2名の反応について報告する。

2 方法

		通常学級児童	特別支援学級児童	参加獣医師
○A小学校	1年生	80人	2人 (自閉症1人, 運動障害1人)	10人
○B小学校	2年生	160人	3人 (ダウン症1人, 運動障害1人 自閉症1人)	12人

3 結果

A小学校の通常学級80人と特別支援学級1人およびB小学校の通常学級160人と特別支援学級2人は実施者のねらい通り、動物に対して関心を持ち積極的にイヌ、ウサギに触れる事ができた。また、聴診器を用いてヒトと動物の心音を聞き比べる事ができた。

(1) A小学校の特別支援学級のA子（女子6歳、高機能広汎性発達障害（高機能自閉症）、IQは現時点では測定不能）の反応

- ①着ぐるみ劇や獣医師の物語には顔を伏せていたり、担当教諭に話しかけたりし、明らかに興味を持たなかった。
- ②イヌ、ウサギに対して熱心に聴診器を使用した。自分と動物の腹部に交互に聴診器をあてた。ウサギの前肢と自分自身の人差し指に聴診器をあてながら、「ウサギさん、大丈夫？」と問いかけ、さらにウサギの前肢を絶えずなでていた。

(1)授業の展開

- ①着ぐるみを使用した劇で、生命の大切さを説明する。
- ②動物（イヌ、ウサギ）に触れさせ、その感触を知る。
- ③聴診器を用いてヒト、イヌおよびウサギの心音を聞き比べ、生命を実感する。
- ④動物全般に関する児童からの質問に獣医師が答える。
- ⑤ある児童がハムスターを生後から死別するまで飼育した体験を、物語として獣医師が話す。

(2)対象

(2) B小学校の特別支援学級のB夫（男子、9歳、中程度の自閉症、IQ70以下）の反応

- ①着ぐるみ劇および物語には、席を立ち違う方向を見ていた。
- ②担当獣医師が何度もウサギに触れさせてみるが、あまり関心は示さなかった。「かわいい」と「こわい」という感想も無かった。
- ③獣医師から「ウサギを見て絵を書こう」と言われ、画用紙にひらがなで「うさぎ」と書いた。
- ④翌日、特別支援学級の授業中に前日のふれあい教室についての絵日記を担当教諭が書かせた。耳と頭と胴のついた動物の絵を描いた。

4 考察

通常、生活科の中の「ふれあい教室」に参加した児童の反応は、動物に触れる前には「かわいい」や「さわりたい」、触れた

後には「あたたかい」や「やわらかい」といった言葉が多く聞かれる。

今回上記にとりあげた児童2人についての考察前に、A子について補足すべき点を挙げる。

A子は授業実施者のねらい通りに、動物に関心を持ち、心音を積極的に聞き動物にずっと触れていた。しかし、担当教諭の話から、この行動については全く別の意図のあることがわかった。すなわち以下のとおりである。

(1) イヌ、ウサギに対して熱心に聴診器を使用していた。

これは心音を聞きたかったのではなく、聴診器そのものに関心を持った。

A子は赤いものなら何でも関心を持つ傾向があり、手に取った聴診器のチューブの部分が赤色であった。ゆえに赤色にこだわりを見せるA子は赤い聴診器を使いたくなった。さらに、A子自身が病気をした時に、病医院で医師が自分自身に対して使用する聴診器を自分も使ってみたくなった。また、初めて聴診器に触れることの好奇心と同時に、その使用方法を知りたくなった。いつもA子自身がされている事(受動行為)を自分がしたくなった(能動行為)。

(2) 動物の腹部と自分自身の腹部に交互に聴診器をあてた。

過去に腹部痛で受診した時、医師に腹部を聴診された記憶がある。

(3) 動物の前肢に聴診器をあて、なでていた。

聴診器をあてること自体を治療行為の1つとして理解している。すなわち、聴診器を当てることで病気が治ると考えている。さらに、聴診器使用の対象は病気や怪我をしている人間であるという考えから、小学校に来ている目の前の動物も病気であると思い、A子自身が指を怪我した時の記憶と併せて、動物の前肢に聴診器をあて手でなでることによって治療している気分となっている。

一般的に自閉症児の認知の仕方は、認知対象との心理的距離が全く取れないとされている。A子は聴診器の赤色を認知し、それ以外の周囲のものは本人の感覚の中に取り込まれない状況であったと考えられる。また、自分自身の一部として赤い聴診器を認識していたとも考えられる。

自閉症児は、共感性が弱く、相手の立場

や気持ち理解しづらいなどとも言われているが、A子は赤い聴診器にこだわりを示した後(シングルフォーカス)、動物に対して声かけをしたり、触れる、なでるといった行動をしている。これは人間同士の関係と、人間と動物の関係は自閉症児にとって異なるものになっていると推測される。イヌやウサギを生き物として意識し、病気にかかるものとしての共感や仲間意識、場合によっては弱者への思いやりを感じていた可能性もある。さらに、自閉症児は不安の強い傾向があり、自身の病医院での体験から、病気だと思い込んでいるウサギが同じ不安を抱えていると思っていたかもしれない。

B夫については、授業当日はウサギに対してあまり関心を示さなかったが、教師と獣医師がB夫に繰り返しウサギをさわらせたり抱かせたりした。すなわち経験を積むことでウサギの柔らかさや重さという質・量を感じ取り、実物を頭の中に浮かび上がらせることができたと思われる。

また、翌日の絵日記は、担当教諭が文字で繰り返し昨日の出来事をB夫に書かせた(「昨日、ウサギを抱っこしました。」等)後、絵を描かせたこともあり、耳と頭と胴体の分かれたものが描けている。B夫が過去に書いた絵のほとんどが円の中に点2つと手足(いわゆる「頭足人」)であったことを考えると、健常児の4歳程度の絵から5歳程度の絵に変換されており、二次元であるイメージや絵と三次元であるウサギの実物が結びつき、翌日の絵日記に動物の特徴をとらえた絵が描けたのだと思われる。

5 まとめ

通常学級の児童の多くは、動物を見て触れることにより愛着や親近感を持つ。

「人間は生まれながらにして他の生命体に対して生物学的な関心を持つ」というバイオフィリア説(Edw Ard. O. Wilson 1984)に沿って考えると、通常学級の児童と同様に発達障害児も動物に対して関心を持ってくれるはずである。発達障害児の感情の発達は通常児と同じという説からも同じことが言える。

今回の児童の反応は、明らかに自閉症の三つ組み(かかわりの障害、コミュニケーションの障害、こだわりの障害)を示しており、発達障害児と常に接している保護者

や教師にとっては予想通りの結果と言える。また、どの程度、動物に興味や関心を持っているのか数値化することは容易ではないことに加え、児童本人の感想を聞いたわけではなく行動から推定しているので確定的なことは言えない。しかし、発達障害児にとってその対象となる物体が生物か無機物であるか見分ける判断をする可能性がうかがわれた。不安感や不快感のない状態で、繰り返し見せる、触れさせる、抱かせるといった行為が、関心を持たせ、さらに進んで愛着や親近感を持たせることが可能になるのではないだろうか。

一度のみの機会に触れるだけでなく、獣医師や教師の指導の下で飼育体験を積むことが、より関心を持たせることになると考えられる。これは、関心を強めるだけでなく、学校での生活パターンの一部として、餌をやる、掃除をするなどの反復が発達障害児にとってスキルトレーニングになるとともに、動物に対する愛着も生じることになると思われる。

今回の反省点として、通常学級の担当教

諭とは事前に授業内容の打ち合わせをしているが、特別支援学級の担当教諭からも個々の児童の特徴を聞いておいた方が良かったと思われる。また、授業の流れが発達障害児に対して情報量が多すぎて、その情報の選択に不自由が生じる可能性を示した。すなわち、着ぐるみ劇や物語が発達障害児にとっては雑音としか聞こえていなかった可能性も考えられる。動物を見せるだけ、触れるだけといった単一の情報に絞った方がその効果はあがると思われる。発達障害児への動物を介在させた教育の報告例は少ないが、個々の発達段階や障害の程度に応じて、動物との接触方法や時間を考えることで、通常学級の児童に対する効果に近づけるのではないかとと思われる。

* A小学校では、2008年4月からモルモット2頭を特別支援学級で飼育する予定。

(奈良県獣医師会)

